No.58

1面	第95回記念二科展
2面～12面	総評、受賞者喜びの言葉と制作のねらい
13面	写真部、デザイン部
14面	第95回展授賞式、ナイトミュージアム・コンサート、講評会
15面	ギャラリートーク
16面	パリ賞・ローマ賞研修報告
17面	シンポジウム、特別講演会
18面～20面	大臣賞選考審査、彫刻懇親会、広報だより、第95回記念二科展懇親会、四部門合同打上げ懇談会、訃報、事務局だより、編集後記

二科

秋季

社団法人
発行人　織田廣喜　発行所　二科会事務所
電　話　03（3354）6646

（絵）宮本三郎　（絵）東郷青児　（彫）ピカソ

第95回記念二科展

第95回記念二科展が、平成二十二年九月一日から十三日まで、六本木国立新美術館において開催されました。

今年は記念展という事で、例年にも増して、活気のある会場が構成されました。

大筋は習いながらも、着実に進化が感じられます。

今回もナイトミュージアムでのコンサート、四部門でのギャラリートーク、二科展ツアー「触って観る」ユニバーサルアート展などが定着しつつあり、二科展の方向性が見えて来た様に感じます。作品集も記念展に合わせ、会員、会友、一般出品者の合本となり、花を添えています。

100回展に向けての二科ニュースの顔、第二段は、第17回、第24回、第27回二科展の画集を使用いたしました。

異常気象も毎年つづけば日常となり、亜熱帯のチョウが都心でも普通に見受けられる様です。猛暑、酷暑の中、制作おつかれ様でした。

第95回展
総評
［絵画］

進化なる記念二科展

常務理事　生方　純一

第95回記念展は準備の段階から会期中を通して記録的な猛暑に見舞われました。この暑さで入場者数にも影響が出るのではないかと懸念されましたが、有りがたいことに二科ファンは暑さをものともせず。昨年を上回る入場で執行部としては安堵いたしました。

第95回記念二科展は特に記念大賞、記念賞を設け優秀作品を顕彰しました。

絵画部の会場は大きさ制限のない会員の大作から小ぶりながら引き締まった作品と、充実した展示が出来たと思います。

抽象傾向に寄らず、具象作品の佳作の中からも磨けば光る原石を発掘してほしいと審査に先立って申し上げましたが今年は抽象、具象のバランスもいい感じに見えました。

また、若い人の可能性を秘めた作品も見逃さず選ぶことができたと思います。

彫刻部の展示も展示委員による展示で、先例に捕らわれない自由さが新鮮な会場の構成になったように感じました。

連日の暑さの中、事務局はじめ実行委員のメンバーも精力的に準備、運営をしていただきました。

絵画部の展示委員会では会友・一般応募作品の抽象作品の佳作および具象作品の佳作を展示するコーナーを設け、また二点入選作品の展示、二段掛展示の工夫など鑑賞しやすさを心掛けました。

特に嘗ての「九室会」が現在の美術界でクローズアップされていることを受けて、九室会の成り立ちの説明と当時の写真を展示し、それに相応しい会員作品を選んで展示しました。

特に総理大臣賞になった作品も現在の九室会を代表する作品として展示しました。

広報部でも切り詰めた予算内で記念展を最大限にアピールする努力をしていただきました。

九十五周年を記念して、美術評論家　瀧悌三氏による「私の思う二科」と題した特別講演会を開催。

また彫刻部が主催した95回記念シンポジウムでは美術評論家、女子美術大学教授南嶌宏氏の基調講演と「美術？アート？芸術？」のテーマで東京都美術館学芸員佐々木秀彦氏、彫刻部理事の吉野毅氏による鼎談を企画しました。

会場では従来のミュージアムトークに加え、広く二科展を理解していただくために二科展ツアーを企画。

恒例になった二科名物の金曜ナイトミュージアム＆ミニコンサートは連日満員。

作品集も従来の会員・会友と一般入選者の作品集の二冊を合本し一冊にまとめました。

記念展が会員の皆様、関係者のご協力で予定通り開催できた事を感謝するとともに、事務局や展覧会委員の一年間に及ぶ不断の努力があったことをここに特筆しておきます。

スケッチする理事長

第95回記念二科展受賞者氏名（絵画部）

内閣総理大臣賞
宮村　長（滋賀）

二科賞
茶谷　弥宏（石川）

第九十五回記念大賞
小野　由紀子（福岡）

パリ賞
根木　悟（京都）

損保ジャパン美術財団 奨励賞
山下　かじん（長崎）

上野の森美術館 奨励賞
いずみ　穂旭（神奈川）

会員賞
井上　邦男（滋賀）
佐野　明子（新潟）
今村　幸子（静岡）
平　権（東京）
大渕　万弥子（京都）
竹井　英子（神奈川）
木脇　秀子（宮崎）
前田　芳和（鹿児島）

会友賞
有馬　広文（鹿児島）
小島　恵美子（滋賀）
田村　一男（岐阜）
餅原　宣久（鹿児島）
太田　京子（群馬）
小林　豊弘（神奈川）
寺田　泰子（神奈川）
山下　和子（石川）
上村　伊佐子（東京）
杉山　重雄（静岡）
徳永　スエ子（愛知）
木村　利加子（千葉）
館　礼子（群馬）
坊中　静六（愛知）

特選
浦上　光喜（熊本）
蒲田　宏（神奈川）
工藤　静香（東京）
竹淵　直美（埼玉）
西　眞紀子（石川）
前田　友幸（鹿児島）
米倉　しおり（石川）
片岡　素子（東京）
川口　福代（東京）
小林　直司（新潟）
田中　昌美（兵庫）
畑　すづ子（三重）
森　千恵（愛知）
加藤　裕子（愛知）
木下　進（滋賀）
すぎもと　和（愛知）
田辺　幸子（新潟）
八田　宜毅（愛知）
山田　祐二（新潟）
金折　文男（広島）
工藤　絵里子（埼玉）
世古　明子（静岡）
永井　勝（東京）
服部　幸雄（群馬）
山本　淳（富山）

第95回記念賞
今泉　あかね（神奈川）
鶴田　英輝（福岡）
木村　ユリ（神奈川）
遠山　恵子（新潟）
佐野　武夫（愛知）
中井　美甫（三重）
塚本　和美（福岡）
吉永　修（熊本）

会員推挙
大桑　和子（石川）
冨士谷　隆（京都）
大脇　春美（愛知）
山岸　睦（石川）
古保木　雄一（滋賀）
吉沢　智大（群馬）
寺崎　陽子（福岡）

会友推挙
稲増　克彦（奈良）
笹島　裕美（石川）
杉山　茂子（静岡）
谷　美津子（福岡）
橋本　弘子（東京）
星野　敦郎（新潟）
吉田　喜代子（鹿児島）
大井　孝信（茨城）
佐野　宣子（神奈川）
鈴木　三喜男（茨城）
田牧　壮平（福岡）
羽山　みよ子（鹿児島）
光谷　良一（兵庫）
渡辺　美加（東京）
落合　江美（静岡）
澤田　友子（茨城）
添野　忠（栃木）
ナカムラ　延（千葉）
廣木　秀夫（新潟）
山岡　明日香（滋賀）
狩谷　昌孝（新潟）
篠原　征子（福岡）
田中　ルリ子（神奈川）
中村　光彦（群馬）
古川　正（新潟）
山下　かじん（長崎）

会員になって
―自己紹介―

大桑 和子
（絵画）

全く思ってもいませんでした。会員になるとは。

大きなサイズの作品が描けるのだろうか。

会員の仕事が務まるのだろうか。とても心配です。

体力も不安です。

でも不安のなかからは何も生まれないだろう。

だから一つ一つ教えていただいて挑戦してみます。

大脇 春美
（絵画）

初入選から三十三回目にしての快挙。二科の先生方、周りの皆様に育てていただいたお陰で、今の私があると思い、感謝の気持で一杯です。

そして、米国にて学生生活を送っていた時から「自分自身のアイデンティティ」を意識し表現してきました。今後も、更なる努力をして、独自性を求めていきたいと、思っております。

古保木 雄一
（絵画）

パターン化した常識を越え破り、無限の創造の世界を知ること！まるで最近の私のことを見透かしたかのような言葉を大学の恩師より今年の年賀状でいただきました。のんきな私に喝を入れてくださったのだと思い、身が引き締まりました。

そのおかげで今年の二科の絵の方も、少しは何かを越えたのかもしれません。

冨士谷 隆
（絵画）

子供の頃から頭の中は妄想だらけで、いつも幸せに満ちあふれ、その感覚は長い年月を費やし今の自分を創り出してくれた。私にとっての妄想は幸せのキーワード。限界のない妄想の世界を、気をてらわず素直に描きたいと思っています。

寺﨑 陽子
（絵画）

モスクワの長い冬は、雪が解け、土が見えたかと思うと、突然タンポポを咲かせ、花の春となります。会員推挙のお知らせは、花の春の喜びと重なりました。

モスクワのバザールで透明な輝きを秘めたブルーの瓶に出会いました。このブルーと人の心の色とを調和させた絵を描きたいと思いました。これからも…

山岸 睦
（絵画）

絵を描いていて楽しいと思った事は一度もありません。苦しいだけです。でも、描かないでいたらもっと苦しくなるので描き続けるしかないのです。キャンバスを前にすると焦燥感に駆られ、空寂の中にいる自分に苛立つばかりです。一枚でも多く先へ進むことが重要なのです。もっともっと描かなければなりません。

吉沢 智大
（絵画）

抽象的な石肌の中で、具象的な貝や骨が主張しすぎず、それでいて存在感を放っている化石をヒントに描いた作品で、会員に推挙され、これからの作品づくりの方向性が見えた思いがしました。今後、より研鑽を重ね、自らが納得できる作品づくりを続けていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

受賞者 喜びの言葉
―制作のねらいなど―

二科賞
茶谷 弥宏

思いがけず大きな賞をいただき驚きとともに数年来取り組んできたテーマが評価されたことをとても嬉しく思います。

公園で遊んでいる子や休憩している人物を組み合わせダブルイメージで表現しました。

二科賞　公園　F100　茶谷 弥宏

空間の重なりの中に楽しいひとときがあふれ出すような作品をめざしています。

第九十五回記念大賞
小野 由紀子

すばらしい賞をいただき驚きと感激でいっぱいです。私は老人や赤ちゃんをテーマに、自分の人生観を取り入れながら描いてきました。

昨今国外では戦争や貧困で食べるものもなく餓死で苦しむ子供達が多く、いたたまれない気持ちで……。世の中の子供達が幸せに育ってほしいという気持ちで絵画にしました。

第95回記念大賞　生きる　S80
小野 由紀子

パリ賞
根木 悟

一つには、プリミティブで粗野な面や線を表現するため、ここ数年、オリジナルにこだわったマチエール作りをテーマにしてきました。今年に入ってからの作品には、それが一つの成果となって表れてる気がします。パリ賞は大きな励みです。これからも二科展を舞台にがんばっていきたいと思います。

上野の森美術館 奨励賞
ウッホッホ　F100
いずみ 穂旭

損保ジャパン美術財団 奨励賞
孤高　F80
山下 かじん

パリ賞　5月のアネクドーツ　F100
根木 悟

特選
こいのぼりと その仲間たち（Ⅰ）　F100
すぎもと 和

特選　なにみているのⅢ　F100
川口 福代

特選　卓上の譜Ⅳ　F100
田辺 幸子

孤高
山下 かじん（長崎）

直線と曲線をコンセプトに制作している。不必要なものを出来るだけ削ぎ落とし、素材の可能性と直線のせめぎ合いだけが画面に残った。色みに頼らなかった結果、強い構成が生きたと思う。言い換えればそれぐらいでしかなく、自身あるいは素材の化学反応が足りない。受賞を糧に新しい価値・美をもっと探りたい。

ウッホッホ
いずみ 穂旭（神奈川）

新しい試みとして、ストーン、シェル等でマチエールを作りイメージを膨らませていきました。この面に何を表そうか、マチエールを活かすために単純な線で古代から現代をフォルムや動物で表現できたらと、試みました。

コラージュとマチエールの試みは始まったばかりです。今後も新しい事に挑戦して描いていきたいと思います。

卓上の譜Ⅳ
田辺 幸子（新潟）

偶然の面白さに出合い、その楽しさに遭いたくて描いています。

平凡な日常生活を題材にしていますが、抽象的にしたら、探究力のある作品になるのか、試行錯誤を重ね今より前進できればと、願っています。

なにみているのⅢ
川口 福代（東京）

初出品から二年目で特選をいただいたことは大変うれしく、今後の活動の大きな励みとなります。木登りをする少年が遠くを見つめながら思い描く世界は、明るく幸せな未来であればいい。絵を見て、そう思う人がひとりでも多くいることを願いながら描いた作品である。個々が幸せならば平和な未来が築け、地球は癒される。

こいのぼりとその仲間たち（Ⅰ）
すぎもと 和（愛知）

まず十六年目にして、やっと、特選に選ばれた事に描き続けて良かったと、心から感動致しました。私のテーマでもある「夢」を、空という大空間に、こいのぼりに沢山の人や物を乗せ、大空を、ダイナミックに、描く事で、観る人に、夢を与えたかった。私は、龍を夢を観ようとする者への、天の守神のように思った。

ケーソンD
浦上 光喜（熊本）

満潮の時には見えない自然との調和、潮が引くにつれて現れてくる自然の営み、コンクリートという人工物が年月を経て、フジツボやカキ、海藻が付着、その生命力に満ち溢れた偉大なエネルギーを日々感じて、どうしても描き

特選　城下煎餅屋Ⅰ　F100
工藤 絵里子

特選　瞳の奥　F100
工藤 静香

特選　ケーソンD　F100
浦上 光喜

特選　人の居る空間Ⅱ　F100
片岡 素子

特選　アベニュー（Ⅲ）　F100
金折 文男

特選　ロード1　F100
木下 進

表したくなった。
今後もそんな思いを、もっと深く表現したい。

瞳の奥
工藤 静香（東京）

気が付けば特選をいただくまでに十五年が過ぎてしまいましたが、私にとってこの特選という扉が最初の一歩になった気がします。
原良次先生と私の父もとてもとても天国で喜んでくれていると思います。そして先生の奥さまが言いました。「絶対に私が生きているうちに会員になってね、約束よ」と。奥さま長生きして下さい。

城下煎餅屋Ⅰ
工藤 絵里子（埼玉）

自分の心を打った対象物を、愛情を持って写し取る作業をしているような気がします。その魅力が共感ではなくても、見る人それぞれの感性で理解でき、ストーリーを想起させるような作品づくりをしたいです。
この受賞の喜びを、今後の創作活動への力に変え、前進したいと思います。

ロード1
木下 進（滋賀）

画面構成に金属とセメントを使いマチエールに奥深いイメージが出るようにしました。全体に広がりと動きバランスを意識しながら描き、異次元の空間へ、現在から未来へと続く道ロードをテーマに、時の経過を色の変化で現わし、試行錯誤しながら中心部に青空を描き、明るい世界を自分なりに表現しました。

アベニュー（Ⅲ）
金折 文男（広島）

今回初めて応募しました。受賞の知らせを受けた時は信じられない気持ちでした。その後、次第に喜びの実感が湧いてきました。
受賞作品は、アメリカミシガン州にあるフランケンムース（ドイツ村）の風景です。閑静な美しい街の空気を表現したつもりです。特に色彩の調和に注力し制作しました。

人の居る空間Ⅱ
片岡 素子（東京）

私は人物と空間を意識して制作してきました。最も身近にいる孫の幼児から子供に変わっていく体型や動作に惹かれ画面に組み合わせてみました。孫に対しての感情に捕らわれずあくまで形と色で画面作りを心掛けました。そうした作品で特選をいただけました事は望外の喜びであり大きな励みとなります。

切り取った風形Ⅰ
田中 昌美（兵庫）

文章で表現するのがとても苦手なのでキャンバスに向かっているようなものなのですが、ただきれいなものをきれいに描くのではなく、反射す

特選　過ぎし日からの風Ⅰ　F100
永井 勝

特選　第二楽章　F100
小林 直司

特選　切り取った風形Ⅰ　F100
田中 昌美

特選　化身Ⅰ　F100
畑 すづ子

特選　待春　F100
蒲田 宏

特選　刻を超えてⅢ　F100
西 眞紀子

る物を媒体にして様々な事象を画面の上で表現出来たらいいなあと思って描いています。これからもその姿勢を壊さずに自分の思いを精一杯伝えていきたいと思います。

第二楽章

小林 直司（新潟）

初出品での特選。ヤッホー、ヤッホー。こだまする喜びのヤッホー。

街ゆけば聞こえてくるよ人間賛歌。歌おうじゃないか、大きな声で。歌えば人生パラダイス。

わが絵には歌あれ、詩あれ、歓喜あれ。あらまほしきは、輝くいのちの交響詩。

いざ行かん、わが友よ。

過ぎし日からの風Ⅰ

永井 勝（東京）

初入選して三年目の今回、特選の受賞は身に余る光栄です。「過ぎし日からの風」は、私が鉄道の激動期に国鉄・JRに身を置いていた過去、OB達の旧交は今も続き風の便りに元の職場を思い出す。また、環境問題が叫ばれる今日、モーダルシフトで鉄道が注目されクリーンな輸送への思いを合わせて構成し制作しました。

刻を超えてⅢ

西 眞紀子（石川）

画面の青色は母なる星―地球の色、空、そして海の色。四十六億年の地球の歴史の中で、生まれては消えてゆくさまざまな命、人間もまた……。そして自分自身もいつの日か…。

今日一日を大切にして生きてゆきたい。

そんな思いを込めて描いた…。

待春

蒲田 宏（神奈川）

師匠を失った者が制作途上行き詰って何を考えたか。より具体的に自分の心象をイメージ出来るレベルへ立ち戻り、生まれ故郷の山陰の風雪、スケッチによく訪れたスコットランドの荒涼、四国遍路を敢行した時のこれから歩いて行く見晴るかす遥かな半島などを思い出し整理して取り組んだ。自分の風景が生まれた。

化身Ⅰ

畑 すづ子（三重）

今回二回で、夢と思っていた特選に選んでいただき、とても嬉しく感謝の気持ちでいっぱいです。

シュッと伸びた葉の気品高さと、体には沢山子イモを付けたサトイモが、雨も降ってほしいだろうとカエルで雨のイメージを表し、喜んでいる様子も描いてみました。

干潟（蟹）

森 千恵（愛知）

「さいた、さいた、さくらが　さいた。」真新しい十二色のクレパス。胸ふくらんだ小学一年生。遥か遠い記憶が浮かぶ。あの時と同じ気持ち。

特選　木材置場　F100
加藤 裕子

記念賞　マッハ7号　F100
今泉 あかね

特選　干潟（蟹）　F100
森 千惠

特選　いざない　F100
竹淵 直美

特選　大地10-A　S80
前田 友幸

特選　窓辺（不安な舞）　F100
山田 祐二

桜色のクレパスで描いた校門横の木。丸坊主山の細い登山道。赤褐色の道の線が美しかった。額装され飾られた。その時の想いが、絵を描くことが好きな私の原点かもしれない。

マッハ7号
今泉 あかね（神奈川）

日々生活の中で感動したこと、胸の奥に引っ掛かっている思い出などを面白い形で表現できればと考えています。

マッハ7号は、人生の中で奮闘している様を勢いとユーモアを交えて描けたらと考えていました。

口下手な自分の唯一ある自己表現の場、この賞を励みにし、大切にしたいです。

木材置場
加藤 裕子（愛知）

絵の具でああだ、こうだとやるのは楽しくて、時間もこま切れにちょこっとずつ描いていたらいつの間にか十六回目の出品となっていました。特選という人生のご褒美をもらった気持ちです。うれしいです。このまま続けて描いていけたら、と思います。

窓辺（不安な舞）
山田 祐二（新潟）

海の見える美術室の眺めに想を得て「窓辺」のシリーズを十年ほど制作してきました。作品を通して、命（生）の儚さや不安感を表現できればと思っています。

自分のスタイルを軽やかに表現できずにいたのですが、今回の受賞でスッと力みがとれた感じです。

今後も魅力のある作品づくりに精進したいと思います。

大地10-A
前田 友幸（鹿児島）

初出品から二十四回目、賞には縁がないと諦めていたので、今回の受賞は嬉しく思っています。

「生物の生命をはぐくむのは地球」太古の昔から生命は大地から生まれ、大地に帰る。十年ほど前から命の起源をテーマにして取り組んでいます。これからも継続していきたい題材です。

いざない
竹淵 直美（埼玉）

この度は特選という賞をいただき誠に嬉しく思います。まさか自分がとれるとは思っておらず、大変驚いております。私の絵は自分の心の世界、もしくは自分の脳の内、それと現実や自分を取り巻く外の世界との葛藤や曖昧さをテーマにして描きました。これからも精進していきたいと思います。ありがとうございました。

公園で憩う人5
八田 宜毅（愛知）

「サバンナへ」、「バオバブの樹の下で」等の題名で、永

特選　刻Ⅲ　F100
服部 幸雄

特選　ゆめのような　F100
米倉 しおり

特選　公園で憩う人５　F100
八田 宜毅

第95回記念賞　対語　F100
遠山 恵子

第95回記念賞
珊瑚礁の化身Ａ　F100
鶴田 英輝

特選　無題Ⅲ　F100
山本 淳

年アフリカの人達を描いてきました。が、もっと身近な人達をと思い、ここ数年「公園で憩う人」を描いています。

今回の受賞、大変喜んでいます。今後、一層精進したいと思います。

ゆめのような

米倉 しおり（石川）

この度は特選という賞をいただくことができて、大変嬉しく思っています。

私の制作は穏やかさ、やわらかさがテーマです。私の頭の中に住んでいる動物たちの日常風景を、特に何も起こらない、こんなやさしい日がずっと続きますように。

そういう願いで描いています。

刻Ⅲ

服部 幸雄（群馬）

生と死、その狭間を歩み続けるイメージを描いています。

生きている瞬間の積み重なりを人物（女）の組み合わせによる画面構成で表現しようと試みています。

このテーマでの制作は、七年目となりますが、挑戦は、今始まったばかりです。

無題Ⅲ

山本 淳（富山）

私は長い間、何のために絵を描いているのか、自分の表現はどうあるべきなのかを考えてきました。ある時、なんとなく自画像を描くとそこに自己の抱えている不安や辛さが表れていることに気がつきました。私が何を表現するべきかを見つけた瞬間でした。

今回の作品は、手を描くことに自己の想いを込めています。

珊瑚礁の化身Ａ

鶴田 英輝（福岡）

継続は力なり～絵画制作と空手道の文武両道より実感として、この受賞を心と体で受けとめています。そして、この時間に自分が生かされている事に感謝します。珊瑚シリーズを五年つづけています。未だ継続したいと思っている。海上勤務が長かったため、珊瑚の保護を訴えたく、日本のそして世界の海を守りたいと思う。

対語

遠山 恵子（新潟）

受賞の知らせを受けまして夢かと、思わず頬をつねった程大きな喜びでした。

モチーフとして女と鳥を、描いてきましたが、鳥には自由への憧れがあります。描いている時、日常からは解放され鳥の様に絵の中で羽ばたけるのです。

これを機に、さらなる向上をめざして、努力してまいります。

変遷

吉永 修（熊本）

記念賞を拝受し大変に感激しています。多数の友人から

第95回記念賞　風の中　F100
中井 美甫

第95回記念賞
増殖のマトリクス（2）　F100
佐野 武夫

第95回記念賞　変遷　F100
吉永 修

第95回記念賞
プレリュード'10ー①　S80
塚本 和美

第95回記念賞　海からの贈り物Ⅲ
S80
木村 ユリ

特選　共存Ⅰ　S80
世古 明子

お祝いの言葉をいただき一層精進せねばと決意しているところです。

朽ちる板。木肌の目を見ていると、時の流れ、その変遷と無常感を考えさせられ自分自身も更なる前進へと念じつつ描きました。

次回に向け制作意欲を高めたいと思っています。

増殖のマトリクス(2)
佐野 武夫(愛知)

このテーマで応募を始めて七年、その間の制作を凝縮した作品の受賞と思い喜んでいます。

華やかな発展を見せる現代社会。しかし、限りなく増大し多様化していく未来社会のコンセプトは不透明です。

現代人が持つ不安や緊張を心象的なモチーフで表現できればと思っています。

風の中
中井 美甫(三重)

テレビは牛の話題だった。九州の牛が危険。長年通った自宅近くの牛舎にスケッチは迷った。怖かった。

頑張って！生きて！と私は呟きながら、乳牛だった牛が、日毎角を出して戦う牛に変化していった。八月、朗報を片手に牛舎に走った。牛達も喜んでくれた。

モ～嬉しかった。嬉し嬉しかった。最高に。

共存Ⅰ
世古 明子(静岡)

サボテンの形のおもしろさ、特徴のあるトゲ・花・実その上日照りや日照不足に耐えられるこの植物の生命力の強さに魅せられ絵を描きつづけました。さらに生き物とのかかわりを知ることで「共存」という主題にたどりつきました。

今後もサボテンを中心とした楽園をテーマに制作をしていきたいと思います。

海からの贈り物Ⅲ
木村 ユリ(神奈川)

二科に魅せられて出品するようになりました。今まで色々なモチーフを描いて来ましたが、最近は海が作りだす自然界の不思議な形や色などをどのように表現しようかと思っております。九十五回という節目の記念賞をいただきました。五年後の自分が魅力ある仕事をできるよう心がけ努力したいと思います。

プレリュード'10 ― ①
塚本 和美(福岡)

初めての受賞で、職場や二科関係者の方々から祝福を受け、感激しました。皆様に深く感謝申し上げます。

プレリュードとは「序曲」という意味で、自然が時をかけて再生を始めたことを表現しています。作品を見て、風や流水の音を感じていただければ幸いです。受賞を新たな起点とし、更に精進したいと考えています。

第95回展
総評
［彫刻］

創造の星

理事　日高 頼子

例年にない異常な猛暑の中、制作に全力を注いだ個性豊かな百八十数点の作品が展示されました。

材質も最近では多様化し石、木、鉄、アルミ、ブロンズ、チタン、ポリエステル、エポキシ、セラミック、紙、竹等で彩色を施した作品が多く観られ、素材の質感と相まって華やかで活気ある雰囲気を会場内に醸し出しておりました。

「現代を認識する徹底性に於いて、一流一派式に会の方向性を限定する態度を採らない」とする二科会趣旨は、多種多様な作品群の裡に確かに息づいているようでした。

会場構成も野外展示、室内展示とも全体として落ち着きと広がりを持ち鑑賞しやすく、試行錯誤する中での陳列委員の苦労が偲ばれました。

尚、巡回展作品展示場所は前光線ゆえ陰影が付かず立体感を表現できなかったのは残念でした。その影響からか、作者の力量が充分に感じられず小品制作の難しさを痛感しました。

今年は95回展を迎えましたが一九一四年に結成した二科会は多くの秀れた芸術家を輩出し、その作品は作家の精神と共に生き続けております。そして今尚その長い歴史は刻み続けております。戦争をはさんでの先輩達のご苦労はいかばかりであった事かと想うにつけ、二科会の為に尽力下された先生方の大きな功績に頭が下がります。

彫刻芸術はまさに人類の歴史と共に歩み続け、しかも彫刻への理解はその人の立っている社会の叡智や感覚を通して深められ、息づいているように想います。彫刻でなければ発言出来ない世界、彫刻でなければ表現できない美を宿す。新鮮で輝く不思議さの内に彫刻の普遍性を想います。

芭蕉の言葉「不易流行」の精神は私にとって深く心に響きます。世の中がどの様に揺れ動こうとも流行に捕らわれず、変わることのない世界を見つめていきたいものと想います。

公募展ならではの機会を大切にして、年に一度の再会の悦びと次代を担う新人の新鮮な作品に希望をかけて、互いの創造の星について篤い心で語り合い論じ合うことが出来ればと願っております。

今日の自分よりも明日の自分自身を観る為に。

会場風景（彫刻）

第95回記念二科展 受賞者氏名（彫刻部）

文部科学大臣賞
鷲崎 直子（東京）

二科賞
林 一平（石川）

第95回記念大賞
島田 紘一呂（東京）

ローマ賞
幡 青果（東京）

損保ジャパン美術財団 奨励賞
金巻 芳俊（東京）

彫刻の森美術館 奨励賞
西井 佑助（神奈川）

会員賞
岡村 謹史（神奈川）
安田 明長（東京）

会友賞
池田 嘉文（東京）
工藤 直（秋田）

特選
井上 なぎさ（神奈川）
佐々木 友二郎（神奈川）
角谷 豊明（新潟）

第95回記念賞
中村 淳子（岐阜）
佐々木 諒（東京）

会員推挙
宮薗 広幸（鹿児島）

会友推挙
金 桂鎬（韓国）
土井 満治（広島）
都丸 洋一（群馬）
丸山 恵美（新潟）

会員になって ―自己紹介―

宮薗 広幸
（彫刻）

毎年搬入日が誕生日ですので、いつも出品すると歳をとります。毎回の陳列作業に上京し、沢山の刺激と課題を鹿児島に持ち帰り、そしてまた作り始めます。アフリカやマレーシアに居る時には現地で作った作品を送りました。どこに居ても何を作っても、今後は二科会会員としての責務を全うしたいと思います。

受賞者 喜びの言葉 ―制作のねらいなど―

二科賞
林 一平

栄えある二科賞という重き賞をいただき、喜びを感じております。たくさんの人たちの応援や支えがあったからこその今回の受賞と実感しております。今回の作品は鎌倉時代の欅の木を譲っていただいて制作を始めました。時代を超えて素材が語るシグナルを自分自身と重ねて考えるのではなく感じて制作する事を試みました。

第95回記念大賞
島田 紘一呂

此処一年ほど、影をテーマに制作を続けています。

猫が持っている幻想的、幻惑的な部分を如何にして表せるか。影もまた幻想的な世界を感じさせます。ヒョロリとした猫と細い影が重なり合って作り出す空気感をより強調するために、影を壁に当て、垂直に立たせました。

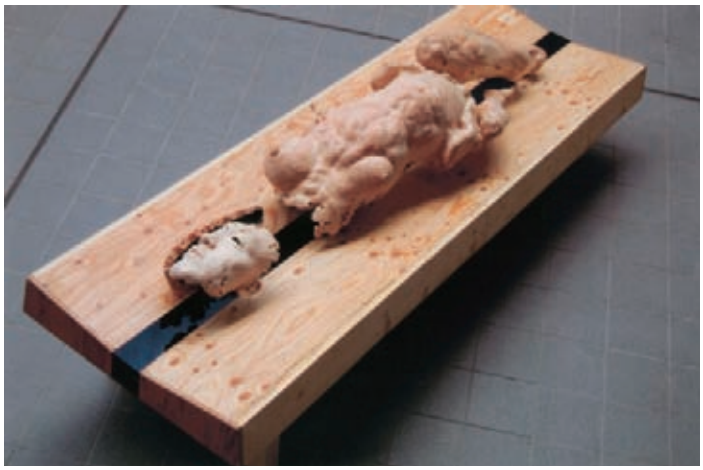
ローマ賞
幡 青果

大きな賞をいただき、嬉しさ一杯です。粘土という可塑性のある素材を使って表現していくのがおもしろく、また大好きでした。これからも日常の何気ない仕草や、情景を通し、人体に何を語らせたいか考えなが

二科賞　大地のシグナル　林 一平

ローマ賞　華　幡青果

第95回記念大賞　ILLUSORY SHADOW 俄雨　島田 紘一呂



彫刻の森美術館 奨励賞　Taboo　西井 佑助

損保ジャパン美術財団 奨励賞　相対アンビバレンス　金巻 芳俊

ら作品を創っていきたいと思います。この賞を機会に、先人達の作品をしかと覧てまいります。

受賞作品
―制作のねらいなど―

Taboo　西井 佑助

今、エネルギーを発散する場を失い、私達の欲動は、歪み、捻れた「カタチ」で放たれ始めました。

この作品は、人体を「物質世界」と「精神世界」の境界のモチーフとして、私たちの持つ世代感を、檜の持つ生々しい質感を借りて表現したものです。

相対アンビバレンス　金巻 芳俊

我々、人間には現状を「変えたい」「変えたくない」という願望を同時に抱く事がある。このように相反する二つの思考、感情が存在し、心的葛藤がある状態の事を「アンビバレンス」という。この二律相反する感情こそ人間そのものだと感じ、カタチに刻み込んだ。

第95回記念賞　おみやげ　佐々木 諒

特選　風になれ　角谷 豊明

特選　青い空　井上 なぎさ

第95回記念賞　静思の時-2010-　中村 淳子

特選　YUJI-ROAD　佐々木 友二郎

青い空　井上 なぎさ

大自然の中で、時の流れが止まった様な、こどものあるひと時を表現しています。

1・5～2・0ミリ厚の銅板を使い、鍛金技法により作りました。風船や、彫刻内部構造体にステンレスを使っています。形を打ち出した銅板を熔接で繋ぎ、作っています。

風になれ　角谷 豊明

自然と人体の一体感を表現したいと考え、風をテーマに挑戦しました。どうしたら一体感が表現できるか風をテーマにした作品は数多くある。そこで人体に穴を開けたりモザイク風に表現し、風を同化させてみたいと思い制作しました。

おみやげ　佐々木 諒

かたちに対し、できるだけ何もしない関わり方であって、より深く関わりたい。つくることからの逃げというよりは、彫刻よりも以前に身近にあるものとして、無意識の日々のなかで出会ってきた記憶の〝木〟があってのことである。

YUJI-ROAD　佐々木 友二郎

「彼女がいる他大学へ進学したい」と正直に先生に切り出すと、「愛と彫刻を同じテーブルに乗せる事は出来ない」と若造には深すぎる言葉が返ってきた。

この自刻像は『人と彫刻を愛して生きていきたい』という私の決意表明です。先生、馬鹿ですみません。

静思の時-2010-　中村 淳子

長い闘病生活の中で身体は自己という心の空間と密接に結びついたひとつの宇宙。心を包む袋であると感じた。肉は大陸。血管は河川。血はそこを流れる水。すべて大宇宙と相互関係を持っている。今、すべてを受け入れ、木と対峙し、静かに己を見つめる私が在る。

時代に埋没することのない魅力ある作品

一般社団法人 二科会写真部

国立新美術館で四年目を迎えた二科展が、絵画・彫刻・デザイン・写真四部の美術展覧会として認知され、今年も多くの方に鑑賞していただけたことは喜ばしい限りです。

今回から二階に入場券売場を設けたことにより、一階受付を通らずに写真部会場へ来場する方達の誘導もスムーズに行うことが出来、大いに役立ちました。

第58回を迎えた二科会写真部展には、全国より過去最多の公募作品が寄せられ、昨年同様「一般部門」「組写真部門」「学生部門」で厳正な審査によって選ばれた作品は、会員・会友作品と合わせ、展示点数一四六六作品に及びました。

写真部会員が入賞作品を解説する形式のギャラリートークも今年は四日、八日、十二日と三回開催し、多くの来観者が熱心に耳を傾ける様子が印象的でした。

ギャラリートークで解説する
畠山俊彦会員、村上則子会員

近年、デジタルカメラの普及によって、わが国の写真人口はますます増大傾向にあります。携帯電話のカメラ機能も、より高性能化され、今や国民の大多数が常にカメラを所持しているという、驚くべき総カメラマン時代と言えます。もはや写真を撮ることは日常的な行為となっています。

膨大な映像が世に溢れる時代を反映し、ややもすると「シャッターチャンス」をパソコンで作るという、写真に対する意識と価値観が希薄という指摘も多くあります。

写真表現はますます多様化し、「写真」という基本的な概念すらゆらいでいますが、二科会写真部は表現者として、創作者として発信するメッセージとは何か、常に自らへの問いかけを怠ることなく精進し、写真文化の向上に少しでも貢献できることを心より願っております。

写真部展示会場

生物多様性とデザイン部の多様性。

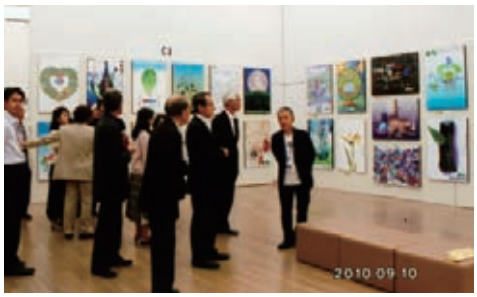
二科会デザイン部代表 今村 昭秀

第95回展も、絵画部、彫刻部、写真部に何かとお世話になりありがとうございました。年々四部門の一体感が増し、深まってきているように思います。

デザイン部では、毎年、公共的テーマを設定して、ポスターデザインを公募して、同じテーマを会友、会員も制作して展示することで、そのテーマを啓発、周知する、ささやかですが社会貢献をすることを特長としています。今回は、環境省、農林水産省の後援による「２０１０年国際生物多様性年」をテーマとしました。これは十月に名古屋で生物多様性についての国際会議があることもあり、十月の二科名古屋展で展示すればタイムリーで効果的であるとの思いでしたが、事情により名古屋展が十二月になってしまい残念です。

生物多様性とは、あらゆる生物とそれによって成り立っている生態系の豊かさや、バランスが保たれている状態や生物が過去から未来へと伝える遺伝子の多様さまでを含めた幅広い概念だそうです。「生命体」は機械のように必要不可欠なパーツだけで生きているのではなく、脳でも、人体を構成する細胞の遺伝子ＤＮＡでも、一見無駄とも思われるようなパーツをたくさんもって構成されているのだそうです。デザイン部の作品も、表現材料、表現方法、表現領域のパーツが驚くほど多彩で、自由で、解放的で、それらの作品の多様性は、生物多様性のあり方、概念と同じではないかと思わせるような作品展示になりました。デザインは「形態は機能に従う」という時代から、生活者の空気をかぎわけ可視化するデザインとして、形態と機能はそれぞれ別個に求められ、現在はデザインのあり方が「形態は欲望に従う」となり、いくつかの情報のパーツを組み合わせて生み出し、特有の魅力で人を惹きつけて刺激をあたえるアーティスティックなデザインになっています。二科展デザイン部の作品は、そうした時代が生んだ作品群ではないかと思います。

ケータイ、メール、ネットに覆われている現在は、多くの知らない人たちとすぐにつながる回路が開かれていて、出かけなくても、会わなくても、多くの人とつながることができる環境にありますが、二科展のような展覧会は、会場で直接作品と接し、表現する人、見る人が出会うコミュニケーションの場として、ネット社会だからこそ必要な貴重な空間だと思います。二科展デザイン部は、ウェブ化社会によるメディアの変容、文化の変容を認識しつつ、時代の空気と時間を共有し、常に「今」を発信する空間でありたいと思っています。



デザイン部 展示会場

第95回記念二科展 授賞式

本年度の二科展授賞式は、織田廣喜理事長のもと、九月一日、国立新美術館講堂に於いて各来賓の方々を含め、受賞者の賞状授与が執り行われた。

今年の授賞式も昨年に引き続き、デザイン部の堀川中央運営委員に受賞作品のスライド上映制作を依頼し、受賞者授与に合せて作品が正面の大スクリーンに映し出され、列席者の感動を呼ぶ素晴らしい授賞式となった。

今年は記念展でもあり、第95回記念大賞・記念賞が特別に設けられた所為もあり、会場は昨年より倍以上の列席者となって、盛大かつ盛況の内に授賞式を終えることができた。

心に深く残る授賞式は、受賞者や列席者、そして式を執り行う関係者の気持ちが一つになって初めて調和のとれた素晴らしい授賞式になっていくと年々実感している。来年度は更に素敵な授賞式となるよう心がけていきたい。

塙　珠世

授賞式

金曜ナイトミュージアム・コンサート

第95回記念二科展では九月四日と十一日の夕刻、会場内で恒例の金曜ナイトミュージアム・コンサートが開催されました。

今年四回目のコンサートは昨年好評を得たアーチストに再び出演協力をいただき、フランスのモンサンミッシェルで大成功を収め現在活躍中の和楽器奏者『AUN』とその仲間達。

そして文化面で幅広く演奏活動を行い多くのファンを魅了するウクライナの歌姫『ナターシャ・グジー』さんをお迎えしました。

「AUNコンサート」

美術館で催すコンサートは様々な制約があり困難が伴う中の企画であるが年々リピーターの方が増え今年は延べ四百人あまりの来場者で賑わい、会場内は展示作品と美しい音楽の空間に酔いしれる一時となった。またコンサート後は平日に鑑賞できない夜間のライトアップされた野外彫刻をゆっくり楽しまれる来場者が多く目につきました。

今後もナイトミュージアムの内容検討を継続的に積み重ね、四部門に亘る多彩な作品群を開放された空間で情報発信し、二科展来場者に結びつけられるよう、広報に努めて参ります。

加覧　裕子

「ナターシャ・グジー」

第95回記念二科展 作品講評会

初日九月一日午後から、恒例の講評会が行われた。三階の一室に集合、山中事務長の司会で始まり、石附・田中の両常務理事の挨拶と担当会員の紹介があり、案内の通り、希望者は各室に散り、自作の制作意図や構図について質問し、担当会員の批評をメモを取るなど熱心に聞いていた。

作者には考え方や技量の違いもあり、具象・抽象・半具象と多様な作品を見るのは、仲々難しい事だが、そこは経験豊かな先輩の事、様々な質問にも丁寧に対応し、良い講評会であった。

松室　重親

講評会風景

ギャラリートーク　絵画部

二科展をもっと楽しんでいただくためにという数々のイベントの一つとしてギャラリートークが九月一日、十二日に行われました。

第一回（九月一日）

国立新美術館に移って四年目、恒例のイベントの一つである初日のギャラリートークは、昨年に引き続き関東地域以外の会員トークの部と、会友、一般の部に分かれて進められました。会友の受賞者を中心に魅力ある新人の作品についてのトークは、出品者のみならず鑑賞者も育てる意味から、今年も中原史雄委員が担当され、自作の作品コピー資料を手にしての技法や表現方法のトークは、鑑賞者はもとより、出品者から大好評であったと聞いております。一方、一室からの会員の部は、作品の傾向、地域、ギャラリー誘導の経路を考慮して八名の会員諸氏にお願いしました。限りある短い時間の中で、取材先（メキシコ）への心情、抽象化と具象、人物のポーズと空間構成、偶像のデフォルメ、平面化の奥に潜む想い。そして徐にポケットからレモンを取り出して絵の味わい方のトークと続き、ラストは、象徴的なフォルムの展開についての熱いトークで、大勢の鑑賞者の拍手の中に終わる事が出来ました。

初日の多忙な中にもかかわらず快くギャラリートークにご協力いただいた会員諸氏に心からお礼申し上げます。

西健吉

第二回（九月十二日）

前述のように一回目は、中原委員、西委員の解説と司会で始まり、受賞作家達のトークに好評の内に終了することができました。

二回目は松室委員の司会で、皆川が担当しました。初めの松田会員は作品などを拡大コピーした作品を参加者に見せながら話し、アトリエでの真摯な制作態度が目に浮かぶようでした。

安食会員はスケッチブックに順々に完成していく作画をみせ、ユーモアあるトーク。金澤会員は抽象に造詣の深さを感じる口調で語り、深見会員は今年のテーマに至った深い心情と技法を分かりやすく説明、上原、永吉、稲生会友の方々は作品に対する深い思いを語っていただきました。また、参加者からのアンケートには作者の作品に対する熱い思いに感動を覚えたと、嬉しいご意見が多く寄せられました。今回の二科展において、ギャラリートークは定着したとの感を強く得ましたが、次回も会員、会友の皆様には力強く熱いトークをよろしくお願いいたします。

皆川恵子

ギャラリートーク　彫刻部

九月五日（日）、第95回二科展彫刻部会場においてギャラリートークが開催された。立体作品への理解を深め、作品をより身近に感じていただけるように、との思いから始まったギャラリートークも今年で五回目となりました。

参加いただいたのは約五十名で、例年どおり二グループにわかれてスタート。

菅原二郎理事、前田耕成評議員の挨拶の後、三宅一樹、信時茂、両会員の司会進行で会場を順に巡りました。

今回のトーク作家は、初入選で彫刻の森美術館奨励賞の西井佑助さん「taboo」（木彫）、同じく初入選で特選の井上なぎささん「青い空」（銅板鍛金）、会友推挙の丸山恵美さん「行雲流水」（塑造・石膏）、文部科学大臣賞の鷲崎直子会員「November―音―」（木彫）第95回記念大賞の島田紘一呂評議員「ILLUSORY SHADOW・俄雨」（木彫）、市川明廣会員「ふわり・夏」（石彫）、以上六名の方々です。各々の作品を作者自身の言葉で、素材や技法の説明は勿論、制作上の苦労話など、多岐にわたり語っていただきました。

今回の六作品はすべて具象的表現による作品となりました。参加者からは「作者ごとに考え方や意図が異なる点を解り易く聞け、楽しめた」との声があった一方、「抽象作品について話を聞きたかった」との意見も寄せられた。他にも「作者の生の想いを聞くことによって、何倍も作品を楽しめた」、「知らなかった技法の詳しい話を聞くことができて、興味深かった」、「毎年、自分なりに観ていたが、より深い感情を持つことができた」など、手応えのある感想を多くいただき、次回開催への大きな励みとなりました。今後も多くの出品作家の方々に、トークをお願いすると思いますので、ご協力をお願い致します。サポートしていただいた方々のお陰でスムーズに進行できたことに感謝いたします。

信時茂

パリ賞研修報告
己の美を求めて
米田 安希

パリ賞をいただき、パリ滞在三カ月の計画を立ててスタートしましたが、事情により五月十二日から六月二十日までの短い研修になってしまいました。今回は北欧経由でパリに入ることにしました。というのは以前より北欧の独特の文化、デザイン等に興味があり、フィンランド・スウェーデンに五日間滞在しました。シンプルで魅力的なインテリア製品、工芸品等があり、余計なものを削ぎ落とす美しさを感じました。近代美術館の現代作品で引かれたのは、人間性を感じさせる作品だった。パリでは、十五年振りに生活できる喜びと、何かこれからの自分を見つけようという思いが複雑に交差していた。以前見た美術館を含め、作品を確認したいという思いがあり、多くの美術館を見るように心掛けました。その中でオランジェリー美術館で、PAUL・KLEE展が開催されていて、作者の思考、表現の幅がみられ良かったです。モネの睡蓮を久し振りに鑑賞して、ホッとして癒されました。今まで行くチャンスのなかった睡蓮を描いたジベルニーに行ってみました。モネが以前から水にこだわり、ジベルニーに、絵を描くために理想の庭を作り、睡蓮を描いてきたか、作品の裏側が見られて良かったです。ポンピドー美術館では、LUCIAN・FREUD展を鑑賞しましたが、作者のすさまじいエネルギーに圧倒されてしまいました。ピナコテーク・ド・パリ美術館では、EDVARD・MUNCH展が開かれており、作者の幼き頃からの人生が投影され、作者と作品との関わりがみられ良かったです。個展も多数見ましたが、テーマを持ち徹底して自分を出している作品は、魅力的でした。今回の研修を今後の制作に生かしていきたいと思っております。

セーヌ川にてスケッチ

モネの庭 ジベルニーにて

ローマ賞研修報告
二人の天才を生んだ地に立つ
前田 忠一

作家にとって〝生誕の地の原風景は、作品にどのように表れるのであろうか。〟今回バルセロナに研修して、カタルーニャ地方出身の二人の作家について迫ってみた。先ず建築家のアントニオ・ガウディ。バルセロナ西南のレウスの生まれで、幼少の頃からリウマチに悩まされ、日曜日の教会のミサ以外は家に居ることが多かった。そこで父親の生業である銅器づくりを日がな見ているうち、物をつくる楽しさを知ったという。その幼少時代の過ごし方が、自然に対する慈愛の心や洞察力を深めさせたのだと思う。ガウディがしばしば訪れてはインスピレーションを得たという、モンセラットに登山鉄道、ケーブルカーを乗り継いで行ってみた。奇岩で有名なこのカタルーニャの聖地は、まるでサグラダ・ファミリアのイメージそのままだった。ガウディの少年の頃の夢であった「カタルーニャのシンボルになるものをつくりたい。」という思い。モンセラットの風景は、ガウディにその夢を実現させるパワーを送っていたのか!!見事な風景だった。その他に、グルエ邸、カサ・ミラ、カサ・バトリョ、グエル公園等、関係する場所を巡って思ったことは、自然の形をふんだんに作品に取り入れ、建築物は、彫刻の中に人が住むといったような空間をつくりだしているということだった。その仕事の跡を訪ねるだけで圧倒され、満足感はあったが、やはり、もう一人の天才、サルバドール・ダリが気になる。ダリの故郷フィゲラスまで、バルセロナから電車で二時間かけて行った。駅から十分、その奇抜な劇場美術館はすぐ分かった。入館すると中庭の巨大なモニュメントに度肝を抜かれる。壁画、天井画は壮大なスケールで描かれ、俺がダリ！と言わんばかり。ダリも自然豊かなこの地で、幼少の頃から蝙蝠(こうもり)の死骸に興味を持ったり、絵に小枝や生きた虫を塗り込めたりしたという。また毎夏行くカダケスの海辺では、岩々にインスピレーションを受けたようだ。ダリの絵には、その風景を描いたと見られるものが多い気がする。膨大な作品群を後にする時、ふと、以前訪ねたブランクーシの生家で見た門のデザインが、彼の彫刻の形そのものだった記憶も甦ってきた。生誕の地の原風景は、確実に作品に反映している！翻って我が作品はどうだろうか、自分を取り巻く森羅万象を感覚的に取り込めているだろうか。そんなことを考えながら、カタルーニャ地方に分かれを告げた。

モンセラットの山々

第95回記念二科展シンポジウム
「美術？アート？芸術？」
―21世紀的美術展を考える―

九月五日（日）十五時～十六時三十分　三階講堂において開催された。

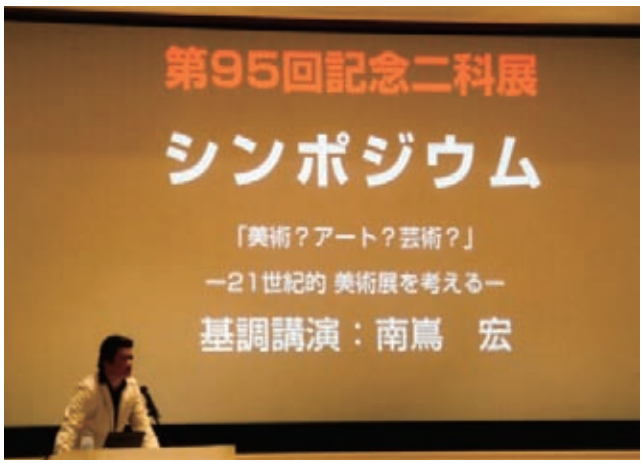
二科会彫刻部の勉強会として発足したシンポジウムも、今年で二回目となります。昨年は、タレントの「はな」さんをゲストにお迎えして、近代芸術の歴史を中心にトークが進みました。今年度は、公募団体が抱える現状と問題を明らかにすることで、今後の二科展の発展の参考にすることを目的にしました。

まず、基調講演を南嶌宏（評論家・女子美術大学教授）先生をお迎えして、「団体展が私に与えてくれたもの」をテーマにお話を伺いました。

ある地方画家の作品のスライドから始まり、いつしか先生の幼少の記憶と重なり、それが先生の父君の作品と分かる頃は、先生の話に引き込まれていました。それが、セザンヌの話へと繋がっていく展開は、美術の根底を流れる美意識の普遍性を感じずにはいられませんでした。

その後、第二部としてパネリストに先の南嶌氏、東京都美術館学芸員・佐々木秀彦、二科会彫刻部理事・吉野毅を迎え、司会・二科会彫刻部会員・二ノ宮裕子により、パネルディスカッションが行われました。まず、吉野氏より、二科会の現状と特徴が述べられた。その後、佐々木氏より都美術館リニューアル後は美術館が団体展に対して、これまでよりも積極的に関わっていきたいという話があり、とても興味深いものでした。最後に、南嶌氏の「若い人には厳しく、そして優しい心で指導してほしい」という言葉で盛況のうちにシンポジウムが終了した。

松田 重仁



第95回記念　特別講演会
「私の思う二科」
・・二科の歴史と将来を語る・・
講師　美術評論家　瀧　悌三氏

九月五日（日）国立新美術館三階の講堂で十二時三十分より表題の講演会が絵画部主催で開催された。

瀧悌三氏は二科発足以来の歴史を紐解きながらこれからの二科の方向について語られた。

大正初期、新しい洋画表現を求めて文展から独立した二科会は在野に開かれた絵画団体として時代の先端を走った。大正期から昭和初期にかけて、二科は多くの無名作家を積極的に紹介すると共に、新しい絵画団体を次々と産み出しながら、多くの多彩な画風を持つ個性豊かな作家の活発な活躍により、昭和初期へ向かっての黄金期を形成してきた。

第二次大戦後の混乱期は東郷青児氏の強烈な個性とリーダーシップの下で乗り越え、開かれた団体として戦後画壇の新しい画才発掘の牽引車となってきた。

平成も二十年を超えてきた今、多くの二科会会員はその風土で育ってきている。作品の上での自己主張を活発にすると共に、今の運営についても、民主的な運営に積極的に参加し、開かれた日本洋画壇の先導者としての二科会役割を更に発展させて欲しい。

瀧講師からはこのような趣旨の会の発展に期待する講演をいただいた。

第95会記念二科巡回展

新潟展
新潟県民会館
平成二十二年十月九日（土）～十月十七日（日）

大阪展
大阪市立美術館
平成二十二年十一月二日（火）～十一月十四日（日）

金沢展
金沢二十一世紀美術館
平成二十二年十一月十七日（水）～十一月二十四日（水）

京都展
京都市立美術館
平成二十二年十一月二十七日（土）～十二月五日（日）

名古屋展
愛知県美術館
平成二十二年十二月十四日（火）～十二月十九日（日）

福岡展
福岡市立美術館
平成二十三年二月十五日（火）～二月二十日（日）

鹿児島展
歴史資料センター黎明館
平成二十三年三月十日（火）～三月二十一日（月）

熊本展
熊本県立美術館
平成二十三年三月二十三日（水）～四月三日（日）

広島展
広島県立美術館
平成二十三年四月十二日（火）～四月十七日（日）

大臣賞 選考審査

大臣賞選考審査所感

林　紀一郎

内閣総理大臣賞の宮村長（絵画）と文部科学大臣賞の鷲崎直子（彫刻）の作品は共に二科95回記念展に応わしい優作だったと思う。

日章旗を風神・雷神と鯰が囲むユニークな構成で現代日本の局相を風刺した宮村の堅確な造形表現はインパクトがあり、その隠喩には訴求力があった。

鷲崎は楠と桂の素材を生かし、直角の裸婦座像と丸太様材の台座との対比を強調して季節の風韻を造形、静謐の空間に古拙感を漂わせる木彫として注目した。

（美術評論家）

大臣賞選考にあたって

南嶌　宏

内閣総理大臣賞の審査は、ゲスト審査員だけでなく、各審査員からも忌憚のない絵画論が披歴され、その言葉の響き合いは審査自体をクリエイティブなものにしたといえるでしょう。僅差で宮村長氏の作品が受賞されましたが、納得のいく結果となりました。

文部科学大臣賞は点数審査でしたが、空間を重要な彫刻的要素とする作品が増える中で、今後はさらに多様な彫刻展示に対応する審査が求められることになるのではないでしょうか。いずれにせよ、ともに二科会の底力を感じさせる大臣賞審査となりました。

（美術評論家・女子美術大学教授）

彫刻部懇親会

第95回記念二科展の展示も六本木に移ってから四回目となりスムーズに終了しました。

乃木坂の健保会館に於いて、彫刻部懇親会が八月三十一日、午後六時より開催されました。

展示作業で空腹の中、しみ込む様なビールでの乾杯でなごやかにパーティがスタートしました。

彫刻部代表の挨拶、先生方のお話、受賞者、初入選者の喜びの言葉、紹介などで盛り上がり、八時半の終了まで、快い時間を過ごし、散会となりました。

広報だより

「二科展ツアー」

新美術館に移転してから二科展会場ではギャラリートークを開催し今年で四回目となりました。これまでの参加者アンケートは年々好評を得ており準備運営においても毎回工夫が持たれるなど、より発展的な企画として定着されて来ました。

今年95回記念二科展では新たに『二科展ツアー』を開催しましたが、内容の違いは当日の来館者が自由に参加するギャラリートークに対し『二科展ツアー』では予め参加申し込みを受け付け、参加者の世代や特徴に合わせたよりきめ細かい解説とコミュニケーションの対応を可能にした点。また絵画部と彫刻部が連携し、二部門会場の総合的な案内を行った点でした。

今回は学校（小、中、高、大学、専門）。カルチャースクール。会社サークル他グループ。を対象に広報を行った結果、自由学園の初等部生徒ら八十名をかわきりに駒場東邦中等・高等部美術部生徒、共立女子大学生、共立女子大学アカデミー講座受講生、京都造形大学通信教育部受講生、社会人グループの方が会場を興味深く観覧され、初回としてはまずまずのスタートの運びとなりました。

今後についても二科会が幅広い世代と様々な環境に向け芸術文化振興の貢献に取り組んで参る事は重要な活動の一環と思われます。あわせて未来の二科会の実りに繋がる事の期待と希望を持ち得ました。

この企画にあたり事務局始め彫刻、絵画部会員皆様に様々なご協力をいただき実現の運びとなりました事を感謝申し上げます。また皆様のご発案をお寄せ下さいます様、宜しくお願い致します。

加覧　裕子

ギャラリーツアー・自由学園生徒

第95回記念二科展 懇親会

九月一日、リッツ・カールトンホテルにおいて開催された。織田理事長の情熱的に、静かに長く、時にユーモアもまじえて、会場全体を、感動の波に包み込んだご挨拶……。

続いてご来賓の祝辞、石附進常務理事の力強い乾杯から、歓談に移り、95回記念展受賞者が壇上に紹介され、エールが送られた。

後半、色紙抽選会へと進み、盛会のうちに懇親会は終宴となった。

四部門合同 打上げ懇親会

第95回記念二科展の打上げ懇親会が、九月十二日午後四時から一時間に亘り、国立美術館三階講堂で開催された。

この度の会は初の試みとして四部会合同での催しとなり、山中事務局長の司会により、各部を代表する会員の挨拶の後、歓談に入り有意義な交歓が行われた。

普段、接触の機会の少ない他部門との交流の場は好感をもって迎えられ、今後の継続についての意見も多く聞かれた。

訃　報

名誉理事　赤羽　恒男氏逝去す

第90回展出品作
リンドスの丘　F100
赤羽 恒男

名誉理事　赤羽 恒男

平成二十二年六月二十二日没　86歳
ご遺族　橋本　苗美（長女）
兵庫県尼崎市潮江
一―四―二―一九〇五

赤羽 恒男氏略歴

一九二四年　兵庫県に生まれる
一九五一年　二科展　初入選
一九六六年　会員推挙
一九六八年　会員努力賞受賞
一九九五年　二科会理事就任
一九九六年　内閣総理大臣賞受賞
二〇〇八年　名誉理事就任

赤羽先生を悼む

「二科は軍隊よりきついところ…」と先生は時折口にされていた。昭和十七年佐世保軍港からソロモン諸島に向かった十八歳の軍国少年。途中上陸したトラック島でスケッチブックと十二色入りクレヨンを買う。戦後絵描きになろうとは露ほども思っていなかった。と私本に回想されている。ふだんは寡黙で近づき難く筋の通らない事には毅然とした態度を取られ、ひとたびお酒が入ると話題には事欠かない引き出しを一杯もっておられた。八十歳近くに心臓そして腎臓と大きな手術を受けた後も、考えられない程にお元気で、その強靭な精神力は運命を生き抜く覚悟の出来た人生の達人であった。二科関西支部は絵画、彫刻、デザイン、写真と四部が一緒、と何十年にもわたり支部を支え、関西二科展にまた二科会に尽力された功績は大きい。今年四月に入院された時も二科百周年展のことをとても気にしておられた。自分の身体より二科が優先、もっとも二科を愛しておられた。かつての日に南方の戦地で少年の眼に感得されたのだろうか、赤白青緑の色彩の絵はもうみられない。私達に大きな宿題を課して肉体と魂は西の彼方へと飛び立ってゆかれた。

ご冥福をお祈り致します。

合掌
尾崎 功

訃　報

会員　鈴木　幹夫氏逝去す

第55回展出品作
葬　F100
鈴木 幹夫

会員　鈴木 幹夫

平成二十二年七月十一日没　79歳
ご遺族　鈴木　百合江（妻）
〒八〇七―〇〇七一
北九州市八幡西区上の原
二―六―二八

鈴木 幹夫氏略歴

一九三〇年　福岡県に生まれる
一九五五年　二科展初入選
一九七二年　会友推挙
一九七三年　パリー賞
一九七八年　会員推挙
一九八八年　会員努力賞
一九九五年
～二〇一〇年　評議員在任

七月十三日二科西人社展のオープニングパーティの時、突然知らされた鈴木先生の死に冷静に対処できず、自分の役割だった万歳三唱を取りやめ、何をどのように喋ったか記憶にありませんが、皆さんに報告し、急遽参加者全員で黙祷を捧げました。

鈴木先生は、去年北九州市立美術館主催の企画展「鈴木幹夫展　横たわる人たち」を開催。一九五八年の作品から近年までの大作がずらりと並びました。体調不良とお聞きしていただけに、会場に足を運ばれたお元気な姿に安心していたところでしたが、それからアッと言う間の訃報にただただ驚き、愕然としました。

鈴木先生との出会いは、私が二科展に出品を始めた一九八五年に遡りますが、作品との出会いは更に十五年遡った一九七〇年、私が高校を卒業したばかりの頃二科展の会場で眼にした「葬」という作品でした。星条旗を思わせる赤と白のストライプの布に包まれた、傷ついて横たわる二人の男性の像で、強烈なメッセージを放っていました。

その後、先生の作品は女性が横たわる情感豊かで構成的な作品へと移行し、二〇〇二年以降は人間の運命や別れをテーマとした作品が描かれるようになります。そして画面には今までにはないやや異質な人物のシルエットが出現します。そこには感傷に流れてしまわないように、シルエットを通して客観的な眼でテーマを見つめようとしている作家の強い意志を感じさせます。運命との折り合いを見つけ出そうとする格闘の中から生まれた作品のように私には思われ、入退院を繰返した中での作画を思うと、胸が苦しくなる思いがします。

いつもクールでスマート、多くを語らない先生でしたが、いつも作品を通して私たちに指針を示してくださり、「あこがれ」であり「目標」である作家でした。

心から敬意と哀悼の意を表したいと思います。

合掌
田浦哲也

訃報

理事 松任谷 國子氏 逝去す

第91回展出品作
佳日　S60
松任谷 國子

理事　**松任谷 國子**

平成二十二年七月二十六日没　74歳

松任谷 國子氏略歴

一九六〇年　二科展初入選
一九六五年　ローマ賞受賞
一九六七年　会友推挙
一九六九年　金賞受賞
一九七〇年　会員推挙
一九七八年　会員努力賞受賞
一九九八年　評議員就任
二〇〇八年　理事就任

思いもかけぬ突然の訃報に接し、我が耳を疑った。受話器を握ったまま暫く彼女の顔がぐるぐる駆け巡った。それもそのはず、つい二ヶ月程前、五月の会員総会の席で、広報担当理事・松任谷國子として立ち、よく通る声で、第95回記念展に向けて計画している事等を話していた。その声は今も耳に残っている。

そもそも松任谷さんとの出合は、一九七〇年の始め、相前後して会員になり、皆から「國ちゃん」と呼ばれる様になってからで、彼女は未だ画家と云うよりタレント・松任谷國子の方が通りがよかった頃である。その彼女が、旧美術館時代、和服の女を描いた作品を見て、その才に感心したものである。

以来、東郷先生や斉藤三郎氏に可愛がられ、画業に専念して来たが、最近では和服そのものに興味を持ち、着物の半襟や、足袋、舞扇を大写しにした作品を描いていたが、いずれそれらのモチーフを統合して、大画面を創る計画であったと思い、それを聞くつもりが果たせず残念な事をした。

東京支部の役員を務めたり、二科展の実行委員として広報の仕事で忙しい時も常に中立の立場を守り、理事に就任してからも、その人柄が皆の信頼を得て、これからも未だまだ二科会のために尽くしてほしかった人である。

自身の体調の事など一言も口にしなかったので、まさかそんなに病が進んでいたとは思いもしなかった。

手も振らず、足音も立てず、ふっと消えてしまった松任谷さん、永い間二科会に籍を置き、数々の記憶を残して行った松任谷國子さん。今は天國で絵筆を執っている事と思います。二科会はまた、惜しい花を失った。

今は只彼女のご冥福を祈るばかりである。

合掌

松室 重親

事務局だより

「台風なにするものぞ！」

第95回記念二科展も無事盛会裡に終了しましたので左記の通りご報告させていただきます。

朗報としてまず入場者総数のみならず、有料入場者数が増加したことが挙げられます。また出品総数も微増した中で昨年以上の厳選を貫きました。国立新美術館に移転以来、新生二科を標榜し、担当理事や実行委員の先生方が広報として様々な動員の企画を続けてきたことや、大胆な展示改革・審査改善・データ整備等を実践した事の成果が確実に数字となり表れてきていると言えます。今回はメトロや会場二階での発券場の設置、会場入口やショップでの記念作品集・絵はがき・色紙の販売にプロスタッフを導入したこと等も効を奏しました。

また台風の中を東京近郊の会員がずぶ濡れになりながら六本木美術館周辺のショップや施設等にチラシやポスターを配布して歩いてくれました。

このような会員全員が広報に参画した、台風をも吹き飛ばす熱意が、十万人を超す入場者につながったに違いありません。

二科展の磁力を強めつつ百周年に向かう総力体制への確かな息吹を感じた記念展でした。また平成二十四年度から改修後の都美術館での使用も認可され、公益法人申請も、最後の詰めの段階にはいっておりますので、後日詳細をご報告させていただきます。チャリティー色紙展の売り上げから生方・川内両氏がNHK厚生文化事業団を訪れ五十万円を寄付させていただきました。各方面でご尽力・ご協力いただいた先生方に事務局より厚く御礼申し上げます。

入場者	単位(人)	昨年比
一般	7723	90増
高校・大学	625	61減
メトロコマース	1520	588増
チケットぴあ	99	24増
有料入場者小計	9967	641増
無料入場者	90822	221増
入場者合計	100789	2853増

搬入点数	単位(点)	昨年比
絵画・一般	3007	64減
絵画・会友	997	62増
彫刻・一般	40	13増
彫刻・会友	88	1減
合計	3888	9増

展示(遺作含む)	人数	点数
絵画・一般	689	698
絵画・会友	244	270
絵画・会員	150	150
彫刻・一般	67	68
彫刻・会友	39	39
彫刻・会員	56	57
展示合計	1245	1282

編集後記

◇　第95回記念二科展が酷暑の中、盛況のうちに終了しました。記録的な暑さにもかかわらず入場者も前年を上回ったようです。

来年から春季展がお休みに成ります。二科ニュースの内容も少し変更をすることに成るでしょう。新しいプランを考えて行きます。

カット　会友 中山 昌美

編集委員

委員長（彫）島田 紘一呂
委　員（絵）倉橋　寛
〃　〃　戸狩　公久
〃　〃　浅賀　昌子
〃　〃　岩田　博
〃（彫）安田　明長

写真記録（絵）本間 千恵子
〃（彫）阿部　昌義

平成二十二年十一月六日発行
社団法人 二科会
東京都新宿区新宿四―三―十五
レイフラット新宿　五〇一号室
電話　〇三（三三五四）六六四六
〒一六〇―〇〇二二